

ミライロと関鑑



学生スタッフ NPO 法人学生ネットワークWAN

取材 株式会社カムラック
代表取締役 賀村 研さん

■今月の取材先 株式会社カムラック とは？
障がい者の雇用増大、障がい者の自立支援を目的に、ホームページ制作業務、アプリケーションやシステムのテスター業務などを行う障がい者支援事業所。障がい者の皆さんの働く場や将来を切り開くべく、これからの時代に対応した職場環境創りに取り組んでいる。

「福祉の非常識はビジネスの常識。 誰もが働ける社会を」

賀村さんは会社を立ち上げる前、どのようなことをしていってましたか？

元々、就職先は建設系の企業で福岡勤務でした。そこで4年経った時、これからはITが来る、と思い、転職に踏み切りました。当時は、マイクロソフトのビルゲイツさん、ソフトバンクの孫さんといった名が一般的にも浸透しはじめた時代でした。そして、アスキー創設者の西さんが顧問をしている会社で、ベンチャーが立ち上がったと聞きました。私自身はメールもやったことがありませんでしたが、その会社へ行く！と丁稚奉公（でっちぼうこう）でもいい気持ちで入社。実際は給料がもらえましたがね。入社当時は自分の給料も稼げない営業マンでしたが、会社の成長とともに全国の上場企業がその会社のソフトを導入し始めた時代で、最終的には営業の責任者となりました。

そこから、どうして障がい者の支援事業を始めたのですか？

30代後半、私は、会社のある東京と、妻のいる福岡での二重生活をしていました。東京では、営業としてひとつ成し遂げたと感じていたので、第二の人生として、家族のいる福岡に戻ろうと決めました。そこで、ITの仕事で独立するよりも、地元

こう考えたのです。40歳近くなり、何か社会のためにいいことをしたいという想いも湧いて、今やっている仕事で地域貢献できることはなかろうかと考えました。その想いからプロジェクトは生まれています。

自分たちの給料が、例えば5、60万円とすると、ITの仕事では、5、60万円の給料の人がする必要のない仕事がたくさんあります。プログラマーやITの世界だったら、お客さんに、こういうものをつくりましょう、こういう設計をしましょうと提案する上流工程。その中で大量のデータを入力する作業など、時間がかかるし量の多い仕事。こういう作業って、大体、月給で換算すると、15~20万円くらいになります。この仕事がどこに流れていたかということ、中国やタイ、ベトナムなどの海外なのです。他にも、ページが大量にあるホームページの引っ越し作業。引っ越し作業を終えたホームページを見てみると、漢字が違う意味で使われていたり、ニュアンスが少し変わってたりすることが多々ありました。だからまた日本のお金で修正を加えます。結果、海外に外注しても、総合的にみるとそんなに安くはないわけです。それに、海外の人件費の単価も上がってきていますね。だったら、海外に流れているお金を日本で使ったほうがいいではないですか。では、この時間のかかる量が多い仕事を誰にしてもらおうのか？ 仕事はたくさんあるのだけど、やる人がいない。単純な仕事だけでなく上流工程の仕事も増えている。

そう考えたときに、日本の商品品質を世界に知らしめた人達、今の高齢者の世代で、ITでいうとベテランプログラマー、エンジニアの人達に戦力になってもらえないだろうかと思ったのです。工程や品質のチェックをしてもらったり、若い人材を育ててもらったり。さらに、プログラミングができる子育て中の女性の方に、働ける時間の中で仕事をしてもらうことはできないかと考えました。**なんでもフルタイムにこだわらなくても良いのです。**ITでそういう柔軟な働き方ができる世の中を作ろうという第一構想があって、そこに、障がい者の皆さんもいるよと聞きました。ようやく本題に入るのですが、ITの仕事を覚えたら、障がい者の人たちにもできるのではと思ったのです。そう思ってやってみたら、その通りでした。それで福岡で、ITを使ったA型事業所のロールモデルを作ろうと思ったのが、カムラックのスタートです。本を出版したり、SNSで情報発信したり、メディアに取り上げられたりしているので、今でも全国から、当事者の方や企業さん、福祉関係の方たちが見学に訪れています。

事業をはじめていく上で、どのような工夫をなさいましたか？

企業を巻き込みました。グループ企業で株式会社 else if (エルスイフ) というソフトウェア開発会社があるのですが、ここには仕事に対する情熱と技術のあるプロフェッショナルな人たちが集まっています。それがあればどんな方でも働ける会社を目指しています。ベテランの方や子育て中のお母さんたちも働いているし、カムラックの障がい者社員も働いています。私は株主であり、取締役会長でもあります。else ifと一緒に仕事をすることで、カムラックに足りない主導力のようなものが生まれます。

他にも、会計の仕付けなどの仕事をしています。今、大手の会計監査法人とお付き合いしているのですが、難しい仕事をする高給な人たちがする必要のないことを、私らが請け負うようになったのです。本来なら顧問の社外CFO的な動きをしなければならないのに、領収証の仕付けがあるので顧問先に行けないという人たちがいて、**だったらその仕事を奪っちゃえ、と。**領収書の仕付けを教えてくださいればできるようにするから、と。

あとカムラックって、実は芸能事務所のお手伝いもしているのですよ。運営をする方は、その仕事の他に、毎日のようにグッズの発注や在庫の管理、生写真の編集などの雑務も抱えています。ただそれがなければ運営スタッフはもっと運営に精を出せるでしょう。だから取っちゃえ、と。それで、運営スタッフは企画を練ったり、営業したり、走り回ったり、運営に打ち込めるのです。

こういうのが企業と障がい者の本来の付き合い方だと私は考



えます。体制が整っていない中で、いきなり障がい者を採用しても長続きはしません。私は初めから障がい者の支援事業を始めようと思ったわけではなく、**ビジネスの感覚で、皆さんの「困った」を解決するにはどうしたらいいのかを考え、多様な働き方を考えた結果、障がい者の支援事業につながったのです。**私がしていることは、**福祉の業界でいえば非常識ですが、ビジネス、商売という観点で言えば、常識だ**と思います。ここの違いを変えていけば、そんなに大変なことではありません。

いろいろな方がここで働いているんですね。

例えば、20年近く引きこもっていたけど、プログラミングに近い形で、ゲームの構造に興味がある社員がいます。だんだん自信がついてきて、今となつては、カムラックからelse ifへの「施設外就労」という形で働いているメンバーの中で、トップにいます。負け癖がついていても、カムラックで仕事をする事で自信がついてきます。「自分が作ったものを、みんなに見てもらえる」という、小さな成功体験を積み重ねていけるのです。

彼らは障害と上手に向き合いながら、仕事に取り組んでいます。そして、カムラックの技術スタッフは彼らに思いっきり仕事をさせて、何かに躓いたら、福祉スタッフが全力でフォローするような体制をとっています。この形ができるのは、私が、障がい者を障がい者と思っていない、戦力、と思っているからです。うちの社員たちは本当に凄いのですから。

最後に今後の展開を教えてください。

企業の障がい者雇用の推進に力を入れていきたいです。私らの事例をもとに、「障がい者の人達は、できますよ」ということを伝えることで、地域をより活性化させたい。仕事のパートナーを増やしていけるようになりたいです。

賀村さんの培った技術や経験があって、この事業所が成り立ったんですね。プログラミングや画像作成の様子を実際に拝見し、集中している皆さんの姿がとても素敵に感じました。





■NPO法人学生ネットワークWAN とは？
設立16年目を迎える学生主体のNPO。「学生だから～できない」「地方だから～できない」を変えるべく、全国19地域の情報発信支援や、地域の関係人口をつくるコンテンツ企画運営を行っている。私たちの運営するサイトガクログもぜひCHECKしてください！

賀村氏のインタビューの続きや若い世代に向けたメッセージをもっと読みたい方はこちらのQRコードからご覧いただけます。<http://www.gakulog.net/>

